

将棋駒ストラップのアイデアで 将棋駒産業がV字回復

天童市経済部商工観光課 主査

沼澤 賢次さん

賛否両論のあるふるさと納税だが、積極的に活用してまちの活性化につなげている自治体も少なくない。山形県天童市もその一つ。江戸時代、地域を治めていた天童藩が財政再建の一環として奨励したことで始まった将棋駒産業は、ふるさと納税でのアイデアが奏功し、衰退からの脱却を図っている。

伝統的工芸品の復活

経済産業大臣が指定する伝統的工芸品。生活の道具でありながら、工芸品としての魅力も併せ持つ。地場産業として地域を支えてきた伝統的工芸品は全国に230品目あるものの、平成26年度生産額は、ピークだった昭和58年の5分の1にまで減少している。

天童市の将棋駒も例外ではない。全国を生産量の9割を占める同市における将棋駒の出荷額は、昭和55年の4億7100万円を境に減少に転じ、平成22年には1億2800万円まで落ち込んだ。

テレビゲームが登場する以前、将棋は子ども



もから大人まで楽しめる娯楽だった。盤と駒の将棋セットは家庭に限らず、温泉宿にも置かれている身近な遊び道具だった。今では将棋セットがある家庭のほうが、むしろ珍しい。娯楽の多様化や人口減少などにより、将棋人口が減っているのだから、将棋駒の出荷額減少は致し方ない。その流れは止められないのではないかと。そう予測される中、平成27年度の出荷額は3億円にV字回復した。

「回復の要因となったのが、ふるさと納税です」と教えてくれた天童市経済部商工観光課主査の沼澤賢次さんは、その仕掛け人である。以前在籍していた市長公室政策企画係でふるさと納税の導入を任せられ、衰退に向かっていた地場産業の流れを変えた。

【ぬまさわ・けんじ】山形県天童市出身。仙台の大学を卒業後、平成15年、天童市役所入り。税務課市民税係を皮切りに財政課財政係、市長公室政策企画係と異動。この間、「財政課財政係 兼 税務課市民税係」「行革推進本部事務局 兼 市長公室政策企画係 兼 財政課財政係」と2つまたは3つの兼務になったことも。ふるさと納税関連のイベントでは、全国で頑張っている自治体職員たちと知り合う機会を得たことが良い刺激になった。「地域を越えて、地元を元気にしたい!」という同じ志をもつ全国の自治体職員と出会えて、めちゃくちゃ楽しかったです。

ご存知の方も多いと思うが、ふるさと納税は平成20年度の地方税法改正により創設された制度で、自治体に寄附すると、所得税と個人住民税が一定額まで控除される。この制度を地域活性化の手段として活用し、寄附者に返礼品を送るなどして多くの寄附を集める自治体が出てきた。全国的に広がりをみせていたふるさと納税を、天童市では平成26年度から本格導入することになった。



天童市を代表するビッグイベント「人間将棋」には多くの観光客が押し寄せる
写真提供：天童市

「導入にあたって、市長から、天童市ならではの何かを考えてはどうか」とのアドバイスをいただきました。それであれこれ考えていたところ、寄附者におまけを贈っている自治体があることを知りまして。それをヒントに、将棋駒をストラップにして贈ることを提案しました。将棋駒に名前を彫るサービスも付ければ、寄附者にとって良い記念になるんじゃないかと思っただけです」

沼澤さんのアイデアは多くの将棋駒製造業者の協力を得て、形になった。他所にはない、天童市ならではの名前入り将棋駒ストラップ

の評判は、瞬く間に広がった。あまりの人気ぶりから、送付は数カ月待ちになるほどだった。「1年目は2〜3カ月待ちで済んだんですけど、2年目はこれまで経験したことのない受注件数でパンク状態になってしまつて。将棋駒製造業者の方には、人員を増やしたり設備投資をしたり、やれることはすべてやってみてもらったんですが、それでも製造が追いつきませんでした」

「8カ月待ち」が現実視された時点で、将棋駒ストラップの受付はストップすることになった。それでも、平成26年度からの3年間で贈った将棋駒ストラップは20万個以上に上る。

寄附者からは、将棋駒ストラップに対するコメントが数多く寄せられた。「将棋駒産業を応援したい！」という寄附者の気持ちがダイレクトに伝わってきた。

「将棋駒ストラップというアイテムは、伝統工芸の復興」という意味で、ふるさと納税の趣旨にマッチしたんだなって。寄附によって一つの産業を守る一助になれることは、寄附者の達成感につながったのかもしれない」

集まった寄附の一部は、伝統工芸士の育成や新たな飾り駒の開発など、将棋駒の復興に大いに活用されている。さらに昨今の将棋ブームも加わって、天童市の将棋駒産業は、かつての熱気を取り戻している。

自力で作成した賦課計算のプログラム

生粋の天童っ子である沼澤さんは、大学

を卒業した平成15年、天童市に入庁した。最初の配属先は税務課市民税係だった。

当時、個人市民税の賦課計算にはホストコンピュータと呼ばれる大型コンピュータが使われていたが、データは容量的に過去2年分しか残せなかった。2年分も残れば充分かと思いきや、そうではない。なぜなら、市民税は過去5年分をさかのぼって修正することができるからだ。

払い過ぎた税金の還付や、逆に不足分の追加徴収など、市民税の修正は毎月発生する。にもかかわらず、データがない3年分の修正は手計算でやるしかなかった。「賦課計算のためのプログラムがあつたら、作業効率が上がるんじゃないか？」——そう思った沼澤さんは、自力でプログラムを作ろうと思いついた。

とは言っても、プログラミンの知識もなければ経験もない。表計算ソフトのエクセルでビジュアルベースックというプログラミンで言語を用いて作ることにしたのだが、なかなか思うようにいかない。隣の課にいた電算に詳しい先輩に教えを乞いながら、悪戦苦闘の日々。日中は担当業務で忙しいため、朝礼が始まるまでの時間が勝負だ。毎朝子供を保育園に送り届けた後、早く出勤して、さまざま作業に取り掛かる。

「数式の組み合わせでプログラムを作るんですけど、税の仕組みって複雑なんです。だからできた！」と思っただけでも、手計算と結果が違ったり、プログラムが動かなくなったり、その繰り返しでした」

およそ半年間の試行錯誤の末、沼澤さんは個人市民税の賦課計算プログラムを完成させた。これにより、毎月発生する個人市民税の修正に関わる作業時間は、2週間ほど短縮された。

「税金の賦課計算って、絶対に間違えられないんです。手計算でももちろん間違えないようにするんですけど、人間がやることで、間違える可能性がないとは言いません。その問題を解決できたことが、一番大きかったのかなと思いますね」

沼澤さんが作ったプログラムは、法人市民税の賦課計算を始め様々な業務に応用できた。

財政課で2万筆以上の資産評価

平成19年、沼澤さんが次に配属された先は財政課財政係だった。税務課が「歳入」を扱う部署だったのに対し、財政課では「歳出」を扱うことになる。プログラムを作った実績を買われたのか、1年目は新しい財務会計システムの導入に携わった。

平成19年は折しも財政破綻した自治体があり、自治体の財政に対して世間から厳しい目が向けられた時期である。財政健全化法が施行され、市としても財政状況を客観的に示すため実質公債費比率や将来負担比率を出さなければならなかった。

同時期、地方公会計制度も改められた。それまで役所で用いられていた会計制度が変更され、資産である「ストック」とお金の

流れである「フロー」を把握することになった。ただ、そのためには所有する資産の時価評価が必要になるが、市の資産は取得した当時の価格が台帳に記されるのみ。となると、保有する資産を時価評価していかなければならない。その業務を財政課2年目の沼澤さんが担うことになった。

「市の保有資産といっても、庁舎だけじゃありません。学校や公民館、道路、上下水道、山林とたくさんあります。それらをすべて洗い出して、1つ1つ評価額をつけていくんです」

評価が必要な資産は2万筆以上。リミットは、年度内の最終議会が開催される3月。与えられた期間は、資産評価と財務諸表の作成を合わせて1年しかないのだ。

「ボリュームがあるのに時間はないというのが、一番大変でした。しかも、財務の知識が全くないまま異動しましたから、また用語もよくわからないような状態でした。数えきれないほどたくさんの本を読んで勉強しましたし、必死でした」

財政健全化法と新公会計制度という2つの大波が押し寄せてくる中、財政課の職員全員が「とにかくやるしかない！」という状況に置かれていた。業務量がハンパなく連日残業だったが、沼澤さんは仕事に面白さを見出していた。

「財政課の仕事をしたことで、市役所の全体像をつかむことができましたし、各部署の予算から、まちがどう動いていくか見えてきました。そこが面白かったですね」

2つの戦略でPRRベタを解消

平成25年、市長公室政策企画係に異動した沼澤さんは「ふるさと納税」を担当する。年度初めである「4月1日オープン」を掲げ、先輩職員と共に制度設計やホームページ制作を開始した。

沼澤さんには明確な戦略が2つあった。

「1つは、四季折々の果物が採れることを年度初めにバーンと打ち出すことです。それで『果物』天童市のイメージを植え付けることを狙いました。果物を売りにする自治体はたいてい1つの果物で勝負していました。天童市は生産量日本一のラ・フランスだけでなく、サクランボ、桃、葡萄、リンゴと1年を通して果物が採れる果物王国なんです。ホームページでもそこを前面に打ち出しました」

牛肉、米、蟹は、ふるさと納税の返礼品として人気が高かったベスト3。天童市には海がないので蟹は無理だが、牛肉と米はある。周囲からは「なぜ牛肉や米を前面に出さないのか？」と不思議がられたが、沼澤さんは「牛肉や米では個性が出せない」と感じていた。

「天童の牛肉も確かにおいしいですが、何十万頭もの牛を飼育する自治体もある中、天童市では1000頭程度です。そもそも頭数で勝負になりません」

それでもう1つの戦略が、冒頭に書いた名前入り将棋駒ストラップである。「四季折々の果物」と「名前入り将棋駒ストラップ」



2018年10月14日に開催予定の「二千局盤来」。4000人が一同に介して将棋の対局をするイベントで、ギネスブック登録を目指す

の二枚看板で、平成26年4月1日、天童市のふるさと納税のホームページが開設された。翌日には全国のふるさと納税を検索できるポータルサイトにも掲載され、全国に向けて情報を発信することになった。

沼澤さんは「前年までの寄附金額が50万円だったのだから、倍の100万円集まればいいほうだ」と予想していた。だが、予想は大きく外れた。初日だけで100万円、1カ月で2000万円の寄附があった。その時点で「いける!」と確信した。

ただ、桁外れの反響に現場は混乱した。「当初は寄附の受付がメールとFAXだけだったんで、作業量も膨大で本当に大変でした」返礼品を提供する地元企業も対応に追われた。返礼品はあつという間に品切れになり、最大限に掻き集めてくれたが、年度途中でス

トップせざるを得なかった。それでも初年度の寄附金額は7億円。体制を整えて迎えた翌年度はなんと32億円にも上った。名前入り将棋駒ストラップの成功は先述の通りだが、四季折々の果物戦略も狙いは的中した。

「ふるさと納税の世界では、果物＝天童市のイメージが定着できたんじゃないかな。おかげで、天童市はPRがヘタ」という周囲からの評価も払拭できて、長年心の中に引っかかっていたものが取れました」

「四季折々の果物」と「名前入り将棋駒ストラップ」は相乗効果を上げ、農業と将棋駒産業がまちを活気づけている。

観光振興に活かす取り組み

今年4月、経済部商工観光課に異動した

沼澤さんは、ふるさと納税での経験を活かした観光振興に奔走している。

将棋駒ストラップへの反響は、将棋ファンの多さの証し。将棋ファンを天童市ファンにしていくなには、どうすればいいのか? マンガを原作にアニメ化や映画化もされている『3月のライオン』とコラボしたのは、その課題に取り組むための一つの手法だった。若者に大人気のこの作品は将棋界が舞台で、キャラクターの一人が天童市出身という設定だ。

『3月のライオン』で天童市を知りました」といふ若者がすくすく多くて。実際読んでみたら面白かったので、コラボを働きかけました」

平成28年度から『3月のライオン』のノベルティグッズをふるさと納税の返礼品としてラインナップすると、若者からの寄附が急増した。その勢いを観光に波及させようとスタンプラリーも開催した。天童市を代表するイベント「人間将棋」のゲストとして映画の主演俳優を呼んだ時には、入場制限がかかるほど女子中高生が詰めかけた。伸びしろはまだある。そこをどう獲得していくかが、観光課としての思案のしどころだ。

「自分で企画して、その歯車が回り出して、これでいけるとわかった時が一番楽しい」という沼澤さんだが、公務員の仕事というものは成果が見えにくいのが常だと理解している。「今日できることは明日に残さな」とことを自らに課しながら、市職員として、まちの未来をつくる仕事に邁進する。

(取材・執筆/ライター 更田沙良)